

女子大國文

第百七十八号

令和八年一月発行

女子大國文
第百七十八号

令和八年一月発行

京都女子大学国文学会

彙

報

(三七)

学習院大学所蔵『万葉聞書』について……………江富範子(一)
—— 解題と翻刻(下) ——

今川氏真『百首・法楽百首』紹介と翻刻……………小石順子(二)

小石順子
大井華央
土井萌菜
東野彩佳
古川

小特集 京都女子大学文学部国文学科編『吉澤文庫善本解題目録』刊行記念
吉澤文庫閉架書庫配架資料六次影印……………(四二)

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百七十八号

令和八年一月十五日 印刷
令和八年一月三十一日 発行

編輯兼 発行者
京都女子大学国文学会

〒616-8502 京都市東山区今熊野北日吉町三番地
電話 075-531-9076
FAX 075-531-9120
振替 0000151314

印刷所
西村印刷株式会社
〒616-8502 京都市上京区上長者町通黒門東入
電話 075-441-4108(代)
FAX 075-443-2628

彙報

二〇二五年度国文学会行事（後期）

○女子大國文第一七八号をお届けします。

○京都女子大学図書館より刊行された『吉澤文庫善本解題目録』

（二〇二五年三月十日）の小特集を組みました。

○前期開催の新人生歓迎行事能楽鑑賞会の感想文、卒業論文発表会の発表要旨・執筆体験記と聴講記、および後期開催の国文学会ウォークの体験記、公開講座の聴講記を掲載しました。

研究室だより

○公開講座を開催しました。参加者は来場者、学生合わせて百九十名近く盛況な会となりました。

○国文学会ウォーク

十一月八日（土）午後

嵯峨・嵐山方面に、学部生十四名が、学科長坂本信道先生、運営委員池原陽斉先生・野澤真樹先生、中島和歌子先生の引率のもと、嵯峨嵐山文華館等を巡りました。

○公開講座

十一月二十日（木）午後一時より於J320教室

『拾遺和歌集』の時代の萬葉歌

本学文学部国文学科 准教授 池原 陽斉 先生

『源氏物語と漢文学』

本学文学部国文学科 元教授 新聞 一美 先生

新入生歓迎行事 能楽鑑賞会（六月十四日）

能楽鑑賞の感想

一回生 山本桃子

初めての学会委員の活動に緊張しつつも、絶対失敗しないぞという意気込みとともに迎えた当日は大雨であったが、これといったトラブルもなく、無事演者の先生方と本番迎えることができた。

前日に、国文学基礎講座にて能楽、狂言の授業があったので、予備知識はあったが、演者の先生方が成り立ちなども含め、解説をしてくださり復習がてらに楽しく聞いていた。例えば、主な能楽の支援者として足利義満が挙げられるが、演者の先生が述べたように豊臣秀吉は、東山に縁のある人物として、今回の鑑賞会では語らなくてはならない。

京都女子大は東山にあるわけで、京都駅まで歩いていくルートに、豊臣秀吉を祀っている豊国神社を通る道がある。また円山公園から清水寺方面に「東山城」と称される場所がある。城があるわけではないが、「ねねの道」など、豊臣秀吉の正室ねねのゆかりの土地を指す言葉である。先生方が東山に縁のある豊臣秀吉の話をした際に、私は真つ先にねねの東山城の話を思い出した。

次に、楽器や衣装、小道具についての話をしたいと思う。楽器

の話なのだが、五分前に食べたものを忘れる私が未だに覚えてるのが小鼓と大鼓の解説だった。演者の先生は「小鼓は湿気があると音がよく出る。」と説明なさった時、私はこう思った。「なるほど、雨が多く湿度の高い日本とは相性がいいな。」と。次に演者の先生は大鼓の説明をする際「大鼓は乾燥していると音がよく出る。」私はこう思った。「なるほど、雨が多く湿度の高い日本とは相性が悪いな。」と。ましてや、先ほども述べたとおり当日は大雨だった。小鼓は会場中にその音を響き渡らせたが、大鼓はそうは行かなかった。同じ馬の皮を使っているのに、仔馬と大人の馬でこうも違うのかと思ったのを鮮明に覚えている。

着付けと、面のことも話しておきたい。能面には、鬼と化す状態や平常の顔などを表現しているのは知っていた。さらに角度によって表情が変わるというのも有名な話だろう。

以前、NHKの番組で、『葵上』が放送されていたのだが、六条御息所の顔が女面から般若の面へと変わる場面がある。演者の先生が面の装着する様子を見せてくれたのだが、かなり時間をかけ、確認しながら締めるという中々手間のかかる作業であった。その作業を、あの唐織の中で隠しながら行っていると気づいた時に軽くシヨックを受けた。ミュージカルなどでもそういった仕掛けや小細工などを見ることができるとは、古くからある伝統芸の能

でも見られるというのは、贅沢なものである。

演者の先生方が楽屋に入る前、私達は舞台に登って、木製の舞台の上にあるゴミを拾ったり、専用のシートで雑巾掛けをしていた。そのときに私は、演者の先生方の足に刺さりそうな棘などを意識して取り除いたり、衣装に引っかけることがないように心掛けていたのだが、着付けの解説でその衣装の値段を聞き、その判断が正しかったことに安心しつつも、万が一を考えてゾツとした。

この鑑賞会の大目玉はやはり『橋弁慶』だろう。私もこれが楽しみに準備を頑張ったのだから。

この『橋弁慶』の内容は、「刀狩をしていた弁慶を牛若丸が懲らしめる」という一般的な話とは違い、「辻斬りまがいのことをしている牛若丸を弁慶が退治に来る」といった内容である。

弁慶を演じていらっしやるのは、先ほどまでユーモアを交えながら楽しく解説してくれた演者の方で、牛若丸はその御子息であるそう。ここで予備知識として、義経は小柄であるというのが定説である。

『平家物語』の「横笛の巻」にて「九郎は色白う背小さきが、むか齒のことにさしいでてるかなぞ」と義経の外見を描写している。つまり「義経は色白で背が低く、齒が特に突き出ている目立つ様子である。」という意味だ。義経の着ていた鎧から想定

した身長が一四七センチだったというので、牛若丸時代も一四〇センチ台だろう。小柄だからこそ、女装して弁慶を欺けたのだと思うと納得である。尚、今回観た『橋弁慶』では立派で勇ましい牛若丸で、弁慶との戦いでは迫力があつた。

能楽はおどろおどろしいというイメージがあるが、『橋弁慶』は特に戦闘場面が激しいように思える。

台詞は全て昔ながらの日本の言葉であるが、聞き取ることができ意味を解するというのも、国文学を学んでいるからこそできるものである。お陰で明瞭に言葉を聞き取ることができ、今でもその台詞のいくつかをおぼえている。その中でも、「希代なる少人かなとてあきれはててぞ立つたちける。」という言葉はなかなか頭から離れない。「弁慶も長刀打かついで、九条の御所へぞ参りける」と聞き取れた時、今住んでいる場所に近く、昔の偉人と同じ土を踏み締めているのだと思うと感慨深いものがあつた。

能というものにいまいピンとこなかった私だが、当日鑑賞してみると幼少期に見た「にほんごであそぼ」を思い出した。そうすると初めて見る『橋弁慶』であるが発声の仕方や足踏みにふと昔見たような懐かしさを覚えた。また国文学科で古典文学を学んでいたおかげで、意味もわからずにみていた幼少期とは違い、はっきりと台詞が聞き取ることができその意味も理解することが

できるようになった自分の成長に驚いた。この鑑賞会のおかげで自分の成長を発見し、更なる探求心に火をつけることができた。

授業と鑑賞で知る能楽

一回生 渡 邊 ところ

国文学科の新人生歓迎行事として行われた能楽鑑賞会に参加した。中学の時に機会があり一度鑑賞したことがあり全く初めてというわけではなかったが、その時には知識がなかったために受けた説明をほとんど理解できず、面白いと思えなかった。そのため今回も始まるまで不安があった。しかし、実際は思っていたよりも明るい雰囲気で、解説してくださった演者の先生のお話もとても分かりやすく、冗談も交えながら進めてくださったので、全体的に和やかで楽しい空気だった。笑いが起きる場面も多く、前に見た時の印象とはずいぶん違った。私と同じように鑑賞に前向きではない学生もいただろうし、はじめて鑑賞する学生もいたと思うが、多くの人にとっていい意味で裏切られたのではないかと思う。鑑賞会は装束の着付け、楽器の紹介、実演など、多様な内容で構成されていた。

はじめに、能の歴史について説明を受けた。能は室町時代に大成された芸能で、その背景には日本語や文学、宗教観などの当時

のさまざまな文化が関わっていることを知った。

着付けでは、衣装が一つずつ整えられていく様子を丁寧な説明を受けつつ見ることができた。普通の能狂言の鑑賞ではすでに装束をつけた姿しか見られないので、裏側を見られたのはとても貴重な経験だった。

囃子の実演では、能で使われる小鼓と大鼓について、湿度によつて音の出方が異なることが説明された。当日はかなりの大雨で湿度が高く、小鼓の音はよく鳴ったが大鼓の音は控えめだった。こんなふうに天気や湿度と楽器の関係を実感できるのは生で体験したからこそであり、印象に残った。

そして、狂言では、能との違いがはっきりした。言葉が分かりやすい上に内容も親しみやすく、大きな笑いが起きる場面が多かった。能の厳かなイメージに対し、狂言はもっと身近に感じることができた。両者を一緒に体験することでそれぞれの特徴や魅力がよく分かった。

今回の鑑賞会で、授業で学んだ知識と実際の体験を結びつけることの重要性を実感した。中学の時にはできなかったことだ。もちろん、実際に体験することで感じることは多いが、知識があることでより興味を持って没入することができるというのはあるだろう。能と狂言の違いを見た上で、特に能は知識があればあるだ

け面白いだろうと感じた。今回は、国文学科に入って事前に授業を受け、予備知識を得たことで楽しみが増す体験となった。今後、も機会があれば異なる演目を鑑賞し、能楽の世界をさらに知りたい。さらに、人形浄瑠璃や歌舞伎など、能から広がる伝統芸能も同様に事前に学ぶことで知識を持って鑑賞してみたいと思う。

卒業論文発表会（六月二十八日）

「髪」の歌語史

—平安中期までの詠まれ方の変遷を探る—

鈴木 琴子

論文要旨

本論文では、和歌における「髪」の詠まれ方について、『万葉集』から『拾遺和歌集』の間にとどのような変化が見られるかについて検討する。検討にあたって、用例は和歌に詠まれている髪の色ごとに分類をした。

髪色の揭示が無い用例の場合、『万葉集』には少女の髪を詠んだ例が多く見られる。「切り髪」や「童女放り」といった子どもの髪型を示す語を詠むことによって、歌に詠まれる人物が子ども

であることが示されている。

『万葉集』より後になると、少女の髪を詠むことは少なくなる。様々な年齢層の人物の髪が詠まれるようになった結果、『万葉集』では見られなかった女性の恋の悩みによる涙と髪をともに詠む歌や、抜け毛を詠む歌が詠まれるようになった。

「黒髪」の用例歌のうち、万葉集歌には若い女性の寝姿を詠んだ例が多い。『万葉集』中の「黒髪」の用例歌が勅撰集と『古今和歌六帖』に入集した例を見ても女性の独り寝を詠んだ例が多く、「黒髪」と独り夫を待つ女性のイメージを結びつける歌は『万葉集』における「黒髪」の代表的な詠まれ方として後世に受容されていたことが分かるが、『万葉集』より後にはそのような詠まれ方がされることはなくなっている。

「黒髪」にかかる枕詞の使用にも変化が見られた。『万葉集』では「黒髪」にかかる「ぬばたまの」と、「か黒き（し）髪」にかかる「みなわた」の用例がある。しかし後世に「みなわた」の用例は無い。また「ぬばたまの」は『万葉集』では官能的描写に用いられることが多かったが、後世では特定のイメージに固定されなくなっている。

髪色の変化を詠む歌に注目する。これらの歌は老いによる身体の変化を詠む歌と、髪色の変化を詠むことによって長い時間の経

過を表現する歌の二つに分けることができる。『万葉集』では時間経過を表現するために髪色の変化を詠むことが多かったが、後世になると老いによる身体変化を示すために詠むことが多くなる。

『万葉集』後の「黒髪」の用例に注目すると、黒髪のみを詠んだ歌よりも黒髪から白髪への変化を詠んだ歌の数が多いことも特徴である。万葉期には女性の黒髪を詠む歌が多かったことと併せて考えると、「黒髪」は女性美を詠む語から老いの対照となる若さを示す語に変化したということが出来る。

「白髪」を詠む場合、『万葉集』では若者と老人との対比がされるが、後世では見立てによって詠まれる例が多い。『万葉集』にも白髪を「霜」「雪」に例える歌があるが、後世には「滝」や「白波」、「梅の花」に例える例も見られる。また、「頭の雪」「年の雪」「いただきの霜」といった発展的な詠まれ方もされるようになった。

和歌における「髪」はその形状や色によって心情や年齢層を表現するための歌材として用いられたが、細かな表現や詠まれ方は時代が下るとともに変化していった。

執筆体験記

私はとても心配性で、三回生の頃は期日までに卒業論文を書き終わることが出来るのか、就職活動と両立することが出来るのかといった不安ばかりがありました。そのためできるだけ早く卒業論文を終わらせようと考え、他の方と比べるとかなり早いペースで卒業論文の執筆を進めていきました。

卒業論文のテーマを考え始めたのは三回生の冬頃です。就職活動に集中したかった四回生の四、五、六月は卒業論文に関する作業にほとんど手をつけていなかったこともあって最終的なテーマを決定したのは七月でしたが、春休みにはある程度テーマを絞り、関連する先行研究を読みはじめていました。

先行研究はできるだけ早くから読み始めておくことをおすすめします。最初の頃は論文を読むことに慣れていなかったため、内容の理解に時間がかかってしまうことが多かったです。また、ゆっくりと落ち着いて読んだ方が頭に内容が定着します。予備知識がしっかりと頭に入っているのといないのとでは、その後の執筆の進めやすさにはかなり違いが出ると思います。

七月にテーマを決定後、それまでに読んできた先行研究や集めたデータなど、その時点で調べられていたことだけを使って実際の卒業論文の形式で下書きを書いてみました。夏休みにはその時

点での成果として先生に下書きを提出し、添削をしていただきました。卒業論文の形式にして二十数枚程度のもので、内容も不完全でしたが、今振り返ると早い段階で先生に内容のチェックをしていたことがとても重要だったように思います。方向性が間違っていないかの確認ができますし、その先の進め方についてのアドバイスなどもいただくことができました。一度添削をしていただいた後は修正と質問を繰り返すような形で進めていき、十月頃にはほとんど完成に近い状態まで進めることができました。

論文の執筆は初めてという方がほとんどでしょうから、分からないことだらけの状態が当たり前だと思えます。私も最初は不安だらけでしたが、多少凶々しいくらいがちょうどいいという気持ちで積極的に先生に質問していくうちにだんだんと進め方が分かるようになりました。皆さんもご自身にあったペースで、気負いすぎることなく卒業論文の執筆ができるよう、応援しています。

歌語「あは雪」の変遷

— 『万葉集』から新古今時代まで —

土井 萌 菜

〈論文要旨〉

「あは雪」ということばを『日本国語大辞典』で調べると、以下

のように説明されている。

(1) 「万葉集」では巻八と巻十に集中し、表記は「沫雪」。「はだれに降る」「ほどろほどろに降りしけば」などから降ったばかりで積もったり固まったりしない新しい雪と思われる。それが消えやすく柔らかいところから泡に見立てられたか。

(2) その後、しだいに単に雪をいう歌語のようになり、平安時代以降は「淡雪(あはゆき)」と表記も語義も混用混同されるようになった。

(3) 「万葉集」から「後拾遺集」までは多く冬の景物であったのが、「源氏・若菜上」では女三宮が「はかなくて上の空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪」と、不安定な我身を今にも消えそうなのはかない春の淡雪にたとえており、「新古今集」では春の景物に変わっている。その分岐点は「堀河百首」のところで、「沫雪」から「淡雪」への語義内容を膨らませながら季も変化を遂げたらしい。

(4) (1)の「源氏・行幸」の例は記紀を踏まえた表現なので「沫雪」と解したが、(2)以下の意には「泡」「淡」が混用されており、便宜的に本項にまとめた。

このように、「あは雪」は時代が経るごとに季節感や主題、表記を変えている。そこで、卒業論文では、『万葉集』から新古今時代までにおける「あは雪」を取り上げて、その意味や変遷について明らかにした。

まず、『万葉集』において「あは雪」は、薄く降る冬の雪として詠まれていた。また、植物を咲かせ散らせる雪として詠まれることもあったが、この意味では平安以降には見られなくなる。『堀河百首』成立以前の平安和歌においては、「はかない雪」という側面が強調され、男女の関係や人生のはかなさを詠む際に用いられていた。そして、解けやすい雪であれば冬や春は関係なく詠まれていた。『堀河百首』で残雪として詠まれると、新古今時代には春の雪として定着した。

表記については、①記紀・②『万葉集』非仙覚本・③古辞書・

④古今集(五五〇番)・⑤『後撰集』(四七九番)・⑥定家自筆、あるいは定家監督書写本から確認を行った。上代では「阿和由岐」や「沫雪」と表記され、「あわゆき」と発音されていた。それが平安以降になると、ハ行転呼音により「あわゆき」と「あはゆき」の区別が曖昧になり、「あはゆき」表記が増加した。漢字表記では平安末期まで「沫雪」が見え、近世になって初めて「淡雪」が

登場する。つまり、「あは雪」は上代から新古今時代まで一貫して「沫雪」と理解されていた。

『日本国語大辞典』では、平安期に「沫雪」と「淡雪」が混用・混同されたと述べられているが、実際には近世になるまでは混同されていなかった。したがって、『万葉集』から新古今時代までの和歌における「あは雪」は「沫のような雪」と解釈すべきと考えられる。

〈卒業執筆体験記〉

私が、「あは雪」という歌語に興味を持ったきっかけは、三回生の前期に履修した演習ⅠAの授業でした。発表のために選んだ和歌の一首に「あは雪」が詠まれており、この語が時代を経てどのように意味や季節感を変化させてきたのか気になるようになりました。

卒業論文の初期には、和歌のデータをエクセルにまとめる作業から始めました。『万葉集』から新古今時代にかけて「あは雪」が詠まれている和歌を集め、部立や詞書、作者などの情報を整理しました。辞書や注釈書、先行研究などを週ごとに調べ、専用のノートにメモをとりながら進めていきました。資料はすべてコピーし、書誌情報はワードで管理していました。

一番時間がかかったのは、写本における「あは雪」の表記を探索作業でした。翻刻されていないものも多いため、影印本を直接確認する必要があり、非常に手間がかかりました。そもそも平仮名で書かれているものが大半で、漢字表記はなかなか見つからず、見つけられればラッキーといった感覚でした。

卒業論文を執筆するうえで、特に役立ったと感じているのは、「資料をすべてコピーしてファイリングする」という方法です。これは小山先生に教えていただいたことで、資料の記述についてすぐに確認でき、進捗報告や執筆の際にも大いに助かりました。先行研究には、傍線を引いたり、書き込みをしたりしながら、気になる箇所を把握しておくようにしていました。最終的に卒論で使用しなかった資料もありましたが、後から「これにはどう書かれていたかな？」と振り返る場面は意外と多く、すべてコピーしておいたのは正解でした。

文章を書き始めてから感じたのは、調べたことをすべて盛り込むわけにはいかないという難しさでした。文章化はしたものの文字数の関係から卒論本文には書けなかった箇所もあります。当初はできるだけ多くの用例を取り上げようと考えていましたが、先生からのアドバイスを受け、平安期の和歌については数を絞ることとしました。今振り返ると、『万葉集』の用例をもう少し減ら

して、歌学書に見える「あは雪」についても触れられたらという思いがあります。限られた文字数の中で、調べた情報をどのように整理し、何を中心に伝えるかを考えながら、執筆するのは予想以上に難しく、同時にとても勉強になりました。

小山先生のゼミでは、毎週のゼミでは進捗報告が求められましたが、私は締切が迫らないと動けないタイプなので、「毎週報告する」というサイクルがあつたからこそ、卒論を継続的に進めることができたと思います。また、対面でのみ質問を受け入れるスタイルだったこともあり、ゼミのある日までに疑問点を整理するという意識が自然と身についたことも、大きな学びとなりました。卒論は大変な作業ですが、自分の「気になる」から始めれば、きつと最後まで取り組めます。わからないことや困ったことがあれば一人で抱え込まず、周囲の人にも相談してみてください。少しずつ大丈夫です、応援しています。

「かはづ」の季節感の変化

——和歌を中心に——

松 下 渚 沙

【要旨】

現在は夏の景物の印象がある蛙だが、和歌における「かはづ」

は『万葉集』ではその多くが清流に棲息する「河鹿」であり、「河鹿」が秋によく鳴いていることから秋の景物として扱われた。『万葉集』の「かはづ」が詠まれた歌は十七首中十三首が川を舞台にしているが、一般的な蛙は川の音で鳴き声がかき消されてしまう。しかし、「河鹿」ならば他の蛙よりも高音域の鳴き声を出すために唯一川辺でも遠くまで鳴き声が聞こえる種類であった。このことから『万葉集』での「かはづ」は「河鹿」であると結論付けた。

平安期に入ると『古今和歌集』で「山吹」と取り合わせたことから春の景物に変化し、「かはづ」が示す範囲が「河鹿」だけではなくなった。それに伴い、川だけでなく池や田などの場所に棲息する「かはづ」が詠まれるようになる。途中、一一八〇年頃から春の歌の数には劣るが、夏の歌に「かはづ」が詠み込まれることが増えた。これは俊恵と後鳥羽院の影響が大きいと考えられ、勅撰集でも部立の季節を秋から春や春から夏に入れ替えており、万葉歌人と平安期の歌人で季節感にズレが生じていたことが確認できた。しかし、夏の「かはづ」は一時の流行にとどまり徐々に数を減らして和歌で夏の景物となることはなかった。

その後時代が下り、俳句では鳴き始めを重んじて「蛙」は春とするが、その他蛙の種類などを細かく分けた名称は夏の季語になっっている。夏の季語になった背景には芭蕉が関係しており、こ

れまで蛙を詠むときはもっぱらその鳴き声が詠まれたが芭蕉は蛙の行動を詠んだことが影響していると考えられる。

和歌を詠む時代や俳句を詠むその時々で同じ「かはづ」という名称に対しても何を本趣として詠むのかが異なった。担う役割が変わったことよって「かはづ」の季節感も変わっていたのではないかと考えられる。

【体験記】

私が卒業論文を書き終えることができたのは、何よりもテーマ選びに成功したからだと考えています。正直なところ、蛙は生き物として好きではないし、もちろんこれまでに興味を持って調べようと思った事ありません。好きなことや卒業論文で調べたいことがあれば、それをテーマにするに越したことはないと思います。が、そのようなものがない人がいるのも事実です。ではなぜ私は今回選んだテーマが成功だと考えているのか。それは、資料の調べやすさと量が適切だったからです。私の卒業論文では「かはづ」という名詞に注目していますから、国文学の論文データベースに「かはづ 和歌」と入れればだいたい欲しい内容の先行研究はできます。なんなら現代では「かえる」と言うことの方が多いので、「和歌」はいらないくらいです。これが、事柄や事象などだと検索方法が難しく該当する資料を探すことに時間がかかりま

す。そしてそもそも、国文学と蛙という単語自体あまり相関がないので、先行研究もそんなに出てきません。物理的にすべて読めることと、すべて読んで取捨選択しても時間がかからないのは大きなメリットでした。資料が多すぎると取捨選択に時間がかかるだけでなく、その分野は「研究されつくしている」可能性が高いので卒業論文を書くとなった時には独自性を出すことが難しいです。しかし、全く出てこないのも卒業論文の方針を決める指標がなくなってしまうので難しくなってしまう。この資料の調べ方が簡単だったことと資料の量が適切だったことが私がテーマ選に成功したと言える所以です。

次に卒業論文を書く上で本当に重要で助けられたのは、小山先生の存在でした。三年生の春休みに入る前からテーマ選びの準備があり、段階ごとに締め切りが設けられ、毎回個別にアドバイスをいただける環境のおかげで計画的に卒業論文を書き終えることができました。当初別の分野のゼミと迷っていましたが、今回のような卒業論文発表会に私も参加し、先輩方が口をそろえて先生のおかげだとおっしゃっていたので小山先生のもとで卒業論文を書こうと決意し、四年生のゼミを決めました。自分はスケジュールを立てるのもスケジュール通りに行動するのも苦手な自覚がありました。いつも締め切りギリギリに手を付け始め、ギリギリに

提出することが多かったです。そのため、細かく締め切りが設定され、授業も毎回個別に進捗報告のスタイルやっていたので毎週少しの進捗を報告できるように前日や当日に準備して、この積み重ねで卒業論文がどんどん進んでいきました。毎週報告することで資料も整理できて、そこで疑問や矛盾に気づくことがあるので友達でも口に出すというのは大切だと実感しました。

友達に話すという面では、自分がテーマにしている内容を友達に伝えておくというのも大切だと思います。友達に伝えておくことで友達が卒業論文の資料集めをしているときに感化栄ありそうな資料があったからと共有してくれたり、ゼミの発表で私のテーマを覚えてくれた友達がテレビで関係ありそうなことやらしいと教えてくれて、実際に卒業論文の内容になったことができました。

皆さん、卒業論文には不安もあると思いますが、同じゼミでなくても同じ学校でなくてもいいので、一人でやらず多くの人を巻き込みながら頑張って書き上げてほしいと思います。

中原中也「盲目の秋」における 「曼珠沙華」の使われ方

山崎 遥

〈論文要旨〉

本論文では、中原中也「盲目の秋」の「曼珠沙華」を中心に取り扱い、「盲目の秋」で「曼珠沙華」が何を表現しているのか検討した。

これまでの先行研究では、「曼珠沙華」について、不吉、秋、赤、血などの「曼珠沙華」のイメージ、「去りゆく女」や過ぎ去った「青春」、激情といった「盲目の秋」との関連に注目されていた。しかし、どの先行研究も「曼珠沙華」を中心に扱っていなかった。

今回「曼珠沙華」について検討した結果、終わりと、女への恋心が強調されていると考えた。

北原白秋「曼珠沙華」や正岡子規「曼珠沙華」では、「曼珠沙華」が死を感じる墓地に咲いていた。さらに、中原中也の秋がテーマの詩も、死が表現された。「盲目の秋」も、死や終わりをを感じる表現がある。

このように、終わりをを感じる要素が複数あるため、終わりが強

調されていると考えた。

「盲目の秋」で「曼珠沙華」は、「私」の中を過ぎ去っていなくなったものだ。この場合、「私」のもとを去ったのは女であるため、「曼珠沙華」は女を表現していると考えた。

北原白秋「曼珠沙華」や正岡子規「曼珠沙華」では、不吉で誰かが忌み嫌う花として「曼珠沙華」が登場した。柳田国男「草の名と子供」から、「曼珠沙華」を手折れば、手が腐るなどの害のあると考えられたとわかる。さらに、害があるとわかっていても手折ってしまうほど、「曼珠沙華」が魅力的であることもわかる。

これらの要素は、同じ「曼珠沙華」という花を介してつなげることができると考えた。そのため、「曼珠沙華」で象徴されている女が、不吉で忌み嫌われ、手に取れば害を与える存在でも、「私」にとっては魅力的な存在だと考えた。「盲目の秋」で、去った女への未練が語られることから、「私」はまだ女を好いていとわかる。以上から、「私」にとって女は魅力的で、何があってもその女が好きだという恋心が強調されていると考えた。

〈卒論執筆体験記〉

卒業論文の発表にあたって、在校生の方からの事前アンケートをいただきました。その際、スケジュールに関する質問が多かつ

たため、ここでは卒業論文執筆についての大きなスケジュールについて書いていけたらと思っております。もちろん、最終的な締め切りだけを提示される先生や、最終的な締め切り以外にも、いつまでにこの作業を終わらせるようにといった目安を提示される先生など、いろいろなタイプの先生がいらっしゃいます。私の場合は、後者でした。そのため、これから書く大きなスケジュールは、あくまで参考程度に思っただけですと幸いです。

私は、入学時から中原中也の作品をテーマにして卒業論文を書きたいと思っていました。さらに、できれば好きな詩である「盲目の秋」、もつと欲を言えば好きな花である「曼殊沙華」をテーマにしたいと思っていました。そのため、一回生のときから近代分野の講義を選択するようにし、ゼミでも中原中也と同時代の作家である太宰治を研究していらつしやる宮崎先生のゼミを選びました。

このように、自分が卒業論文のテーマにしたいものははっきりしていたので、三回生の春休みから中原中也の全集を読み始めました。その際、自分のテーマにしたいことがテーマとして成立するかどうか、そのほかにテーマにできそうなものはないのか探しながら読み進めました。

四回生の四月には、「盲目の秋」の「曼殊沙華」をテーマにす

ると決めて、先行研究や同時代資料を調べ始めました。毎週授業終わりに図書館に行って卒業論文を進める時間を作ることで、卒業論文に継続的に取り組めるようにしました。

夏休みは、時間があるからこそ家や大学から少し離れた図書館に資料を探しに行きました。個人的には、ちょっとしたお出かけ気分が楽しかったです。さらに、夏休みの間に自分が中心的に取り扱う先行研究を決めました。これについては、宮崎先生から提示された目安の一つでした。

夏休み後は、さらに資料探しを進めました。そのほかにも、メインで取り扱いはしないけれど自分の主張に関わる先行研究について調べ始めました。調べたことや自分の考えについては、その都度文字に起こして自分の頭の中を整理するようにしていました。そのメモをまとめながら、卒業論文の内容の執筆も進めていきました。

十一月には、卒業論文の内容をほとんど完成させていました。卒業論文を提出する十二月までは、最終的に内容をチェックしたり、卒業論文の形式を整えたりしていました。

以上が大きなスケジュールです。この質問に答えるにあたり、自分のスケジュールを思い出してみました。資料や先行研究を探せばかりだったように思います。

在校生の方は、卒業論文について不安なこと、壁にぶつかるともたくさんあると思います。私も、まとめ方がわからなくなったり、自分の卒業論文はこの方向性で大丈夫なのか不安になったりしました。そんなときは、ゼミの先生やご友人に相談してみてください。解決の糸口が見つかったり、もっと頑張ろうという気持ちになれたりすると思います。また、卒業論文の執筆はつらいことだけではありません。一つのを完成させるという達成感や同じゼミの仲間と切磋琢磨する楽しさもあります。

どうか、これから卒業論文に取り組まれる皆さんが、卒業論文を書き終えた際には、達成感で満ちた状態でありますように。応援しております。また、お世話になりました先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

山川方夫ショートショート作品に於ける

他者と死の関連性

―「暑くない夏」を中心に―

馬 瀬 愛 央

〈論文要旨〉

本論文では、山川方夫ショートショート作品において〈他者〉や〈死〉がどう描かれているのかについて「暑くない夏」を中心

として実際のショートショート作品例を挙げながら論じ、山川は〈死〉の概念を通して〈他者〉を描くことによって〈他者〉について知ろうとしていたという結論を出した。

まず一章では山川と同時代の作家らの発言をもとにショートショートの定義を大まかに〈オチがあるもの〉、〈SFのもの〉、そして〈内容にこだわらないもの〉の三つに分類した。加えて原稿料が安いことや、文学としての評価が賛否両論あったことにも言及している。

二章では山川自身の発言や山川と交流があった人々らの発言、実際のショートショート作品例をもとに、山川がショートショートにおいて人間に対する〈恐怖〉をテーマとしていることを論じている。山川は〈他者〉に強く関心があり、〈他者〉とは何かを明らかにするために作品を書いていたと考察した。

続く三章では、山川方夫が人一倍強く死を意識していたことについて、戦争の経験および癲癇という持病の二つの視点から論じている。身近で魅力的な〈死〉によって生を実感し、その〈死〉への意識こそが山川にとって小説を書く原動力になっていたと述べる。

最後に四章では、「暑くない夏」を中心として山川のショートショートにおける〈他者〉と〈死〉の意味について論じている。

「暑くない夏」は何百万人に一人という奇病を患って五感の感覚のほとんどを失い余命一年となった女と、その女が通っていた大学のクラスメイトだった男との繋がりに焦点を当てた作品であり、一九六二（昭和三七）年七月一日発行の『朝日新聞（夕刊）』第九面で発表された。まず「他人の夏」と比較することで〈他者〉とは分からないもの、繋がれないものであるとしながらも〈他者〉を知りたいという山川の考えが作品に表れていると考察している。さらには「赤い手帖」や「軍国歌謡集」も参照しつつ、他者における恐怖や他者の存在の必要不可欠さについて〈死〉という概念を通して様々な視点から描くことで〈他者〉とは何かを明らかにしようとしていたとまとめた。

〈卒論執筆体験記〉

私が一番に伝えたいことは「研究対象への気持ち」を大切にしながら続けてほしいということです。

私は山川方夫の作品が好きです。山川方夫という作家が好きです。とはいえ、実をいうと山川を研究対象と決定するまで非常に悩みました。好きだからこそ、果たして自分に研究という形で彼が作品に込めた想いを汲み取ることが出来るのだろうかという不安があり、なかなか決断しきれなかったためです。また、先行研

究が少ないことも気がかりでした。

なんといいっても、卒業論文はかける時間も気持ちも並大抵ではありません。正直、私は膨大な作業の中で研究自体が億劫になってしまいうことも多かったので、決して順調とはいえないスケジュールでした。

あまり参考にしないでほしいという前置きのもと、ここからは一応自分のスケジュールについて書いてみたいと思います。

山川が好きだという理由だけで研究対象に決めたのが四回生の四月だったのですが、それからしばらくは山川の書いた作品を読み漁ってばかりいました。実はこのときまだ山川という作家を取り上げること以外、どの作品を扱うかすら決められていなかったからです。梅雨の匂いがする頃、大学に向かうバスのなかでふと頭に作品内の台詞が浮かんで、これってどういう意図の言葉だったんだろうと疑問を持ったことをきっかけに、ようやく扱う作品と大まかなテーマを決めました。

作品が決まったとはいえ、楽しい文章ばかり読んでいるわけにもいかなないので少し面倒になったり、先が見えない不安と焦燥感から何度も投げ出したくなったりと、秋頃は論文から離れて自分の時間を過ごすことが多かったのです。もつとこのとき時間をかけていればという後悔もあります。休む時間が長いほど「あ、山

川の作品読みたいな」と思うことも積み重なっていったので、自分の場合は結果的にモチベを作る良い息抜きになっていた気がします。

最後の一ヶ月半はそれまでの遅れを取り戻すべく、ほとんど毎日論文と向き合っていました。先にも述べた通り、山川を扱うなら出来る限りの確かな論文を書きたいという一種の強迫観念があったのも相まって、このときはなかなか論文の道筋が決まらず苦しい時期でもありました。

そんななか、ゼミの担当であった峯村先生に相談したときのことを今でも鮮明に覚えています。山川の作品に自分の考えを押し付けているだけではないか、論として書き上げることは不誠実ではないかと問うた私に、先生は道しるべとなる言葉をかけてくださいました。

その言葉を知りたい方がもしいらついたら、おそらく自分の口から自分の尊敬する方へたずねたほうが良いと思うので、この文章のなかで記すことは控えさせていただきます。ただ一言伝えるならば、的確すぎる論文は書いている自分にとっても山川にとってもつまらないだろうと今の私は思います。

正直不完全燃焼な部分も多くありますが、山川に対して自分なりに一つの結論まで書ききれたことが誇らしく、それは振り返る

とやはり好きの気持ちがよくも悪くも原動力になっていたからだと強く感じます。人によって研究の動機は様々かと思いますが、どうか卒論を執筆する中でその気持ちを大切にしてもらえたら一先輩としてとても嬉しいです。

最後に。峯村先生をはじめ四年間導いてくださった先生方、本当にありがとうございます。そしてこんな拙い文章を参考にしようとしてここまで読んでくださったあなたにも心から感謝いたします。どうか無理しすぎないでくださいね、応援しています。

卒業論文発表会に参加して

四回生 井上 和奏

六月二十八日に行われた卒業論文発表会に参加させていただきました。

私は現在、上代文学ゼミに所属しており、和歌をテーマとして卒業論文を執筆しようと考えています。今回の発表会では、五名の先輩方のうち三名が和歌に関する発表をされており、私にとつて学びが多く、有意義な時間となりました。各先輩の論文発表では、研究内容のみならず、研究に取り組む際の工夫や姿勢についても具体的に語ってくださり、大変参考になりました。例えば、先行研究の探し方や、図鑑やテレビ番組の活用、定義づけの重要

性等を話されてきました。その後の座談会では、各先輩の論文執筆体験談を伺いました。実際に論文を執筆した方々の生の声を聞くことで、私自身が今後どのような意識や姿勢で臨めばよいのかを考えるきっかけとなりました。中でも特に印象に残った内容を二点、次に記したいと思います。

一点目は、「逆算してスケジュールを立てていくことの重要性」です。ある先輩は、「後期に執筆を行っていく中で、提出締め切りから逆算して計画を立てることで、もっと余裕を持って論文を完成させることができたと思う」と反省点を話されていました。このアドバイスを受け、締め切りまでまだ余裕があるからといって無計画に進めていくのではなく、自分自身で期限を計画して取り組んでいくことが必要だと思いました。また、このアドバイスは執筆時だけでなく、先行研究収集時にも言えることであるため、現時点から十二月の締め切りまでを逆算して、各月末までに到達すべき目標を持って取り組んでいこうと思います。

二点目は、「参考文献や先行研究の管理の仕方」です。先輩の中には、「先行研究を読んだ時には、考えたことをメモとして残していた」、「閲覧済みの資料と未読の資料が混在してしまわないよう、リスト化してまとめていた」といった工夫を話されていました。このお話を受け、研究が進むにつれて扱う資料の数も増え

てくるため、私もぜひ実践していきたいと思いました。

その他にも、テーマ決定の際に注意した点、論文完成までのスケジュール、夏休みに行っていたこと、論文の分量に関する感覚、気分転換方法、提出前の見直し作業等、どのお話も今後の執筆において役立つ内容ばかりでした。

今回の発表会に参加したことで、今ある不安が和らぎ、本格的に始まっていく研究や執筆へのモチベーションを高めることができました。限られた時間の中で、先輩方のアドバイスを参考にしながら、取り組んでいきたいと思います。

最後になりますが、ご発表いただいた五名の先輩方、貴重なお話をありがとうございました。

国文学科卒業論文発表会に参加して

四回生 沖 田 友 羅

卒業論文発表会に参加させていただき、まず感じたことは、先輩方の研究の成果や体験を直接伺うことのできる機会の貴重さと有益さでした。私自身もこれまで論文を書くための作業を進めてきましたが、学期末のレポートとは異なり、大学生活の集大成として論文を書き上げるといふ実感はあまり持つことができていなかったように思います。実際に卒業論文を完成させた先輩方のお

話を拝聴することは、自分の中でのビジョンを固めるという点において大変参考になるものであり、卒業論文執筆へのモチベーションを上げることができた機会でした。

この発表会の魅力は、自分の所属しているゼミ以外の、普段関わることのない先輩のお話も聞くことができた点です。私は近代文学を専攻しており、近代文学についての発表はもちろんとても面白く参考になるものでしたが、他の分野の先輩方の発表もテーマの決め方やレジユメのまとめ方、資料の探し方といった点でも参考になりました。あまり知識のない分野の発表でも、分かりやすくまとめられたレジユメのおかげで面白く聞くことができました。調査の中でテレビ番組から着想を得ている方もおり驚きましたが、日ごろから自分の専攻に限らず広くアンテナを張っておくことが思いがけない発見につながることを学びました。近代の作品も様々な古典文学に影響されており、いろいろな作品と関わり合いながら生まれてきているため、広く文学に対する興味を持つべきであると日頃から感じていましたが、文学だけでなく、その外の世界についても視野を広く持つて見ていくことの大切さが感じられました。

さらに、実際に論文を書き上げた先輩方のスケジュールや、調査・執筆の上で注意すべき点といったところを聞くことができた

点がとてもありがたかったように思います。卒業論文の提出期限まで半年ほどあり、資料の調査はもちろん執筆にも時間がかかることは頭ではわかっていても、なんとなく時間があると思ってしまう、危機感を持つて作業を進めることができなかったのですが、七月や夏休みの時点で既に論文執筆を始めていたというお話を聞いて、夏休み中に一章分だけでも執筆できる程度には情報をまとめておかなければならないことを実感し、直近の目標ができたことで、自分のやるべきことも明確にすることができたように感じました。また資料の保管の仕方について他のゼミの先輩方が行っていた方法を聞くことができたほか、一度でも見た資料は書誌情報を控えておく、執筆後の見直しは必ずするといった基本的なこととの積み重ねの大切さを強く実感することができました。

こういった調査・執筆の上で参考になる情報の他にも、息抜きの方法や就職活動との兼ね合いといった、生活上でのアドバイスもいただくことができ、学問的な面でも生活的な面でもたくさんの参考になる情報を聞くことができた機会でした。この会で得た情報を糧に、これからの数カ月を悔いなく過ごしていきたいと思っています。お忙しい中発表して下さった先輩方、本当にありがとうございました。

卒業論文発表会に参加して

四回生 勢 井 遥 香

六月、自分の卒業論文の方向性が固まりつつある時期に、私は初めて優秀論文発表会に参加しました。これまで三年間一度も足を運んだことがなく、四回生になってから初めて参加しました。卒業論文のテーマ自体はすでにおおよそ決まっていたものの、ゼミの中間発表や資料収集を進めるうちに「自分の研究の芯は何なのか」と迷い始めていました。そんな折に先輩方のお話を伺える機会があると知り、何かヒントを得られるのではないかと思いつき参加を決めました。

発表を聞く中で、特に印象的だったのは「自分の卒論を他人に見てもらふことの大切さ」です。私はこれまで、文章や作品を人に見せることを避ける傾向がありました。昔から、間違いを指摘されることに苦手意識があり、絵にせよ文章にせよ人前に出すことをためらってきたのです。しかし、先輩のアドバイスの中に「人に見てもらふことで初めて気づけることがある」という言葉がありました。確かに、自分ひとりで推敲しているだけでは、言葉の使い方や論理の飛躍といった弱点を見落としがちです。ゼミの中間発表でも、指摘を受けて初めて気づいた点が多々ありまし

た。今回改めて先輩の話を聞き、「他者の目を通すこと」こそが論文を磨く重要な過程なのだと思えました。

さらに心に残ったのは、「その分野を全く知らないの方が新しい視点を与えてくれる」という先輩の言葉です。専門知識を共有している相手には少ない言葉でも意図を理解してもらえらる一方で、異なる分野を学んでいる人の目には、私が当然の前提としている部分の矛盾や曖昧さはつきり映るのだと思います。これまでは同じゼミ生にしか論文を見せていませんでしたが、今後は他学部や異なる研究分野の友人にも読んでもらい、意見をもらうことで、新たな気づきを得ていきたいと考えています。

また、先行研究の整理や活用方法についての具体的なアドバイスも、大きな収穫でした。私自身、多くの文献を収集しているものの、何を手元に持ち、何をまだ確認していないのか把握できなくなりつつありました。先輩方は、ファイルの分け方や要約メモの書き方といった実務的な工夫を紹介してくださいました。こうした方法を取り入れることで、研究の効率が上がるだけでなく、論文執筆の際に必要な資料を的確に参照できるようになると思います。

さらに、「奥付コピーは必ず」「先行研究は焦らず丁寧に読む」といったアドバイスも印象に残りました。これらは、実際に論文

を書き終えた先輩だからこそ語れる実感のこもった言葉だと感じます。今回の発表会で得た学びを今後の卒業論文執筆に活かし、最後には悔いのないものを仕上げたいと思っています。

最後になりましたが、お忙しい中、私たち後輩のために時間を割いてくださった先輩方には、心から御礼申し上げます。

国文学科卒業論文発表会に参加して

土 谷 光 里

今回初めて、卒業論文発表会に参加しました。昨年までは参加を考えていなかったのですが、年によって発表してくださる先輩方の専門分野が異なります。今年の先輩方の分野は、上代、中古、近代でした。私は現在、近代と国語学の演習を受講しています。なので、国語学の発表も聞きたかったというのが本音です。一回生二回生の間はまだ参加しない方がいいな、なんて思っていました。去年は国語学の先輩も発表されたそうです。今になって知ったので参加したらよかったと思っています。こればかりはタイミングなので、皆さんぜひ早めに参加してください。

松下先輩の発表が印象に残ったので少しお話しします。松下先輩の発表は、歌語「かはづ」の季節感の変化に関するものでした。

研究の中で、カエルそのものについても調べるようになったそう
で、お話に上がっていたテレビ番組「ダーウィンが来た！」を私も偶然視聴していたのでなんだか嬉しかったです。カジカガエルの鳴き声がいかによく聞こえるかという実験が面白い回で、普段何気なく見ているテレビも研究材料になることが実感できました。発表の終わりに、先輩が「カエルは気持ち悪いです。」とおっしゃったことも印象的でした。嫌いなものは研究対象にするべきでないという話を先生からも伺ったばかりなので、テーマ決めの際には注意しようと思います。

私は現在、近代と国語学のどちらかで卒論を書くか決めかねています。大学入学時からこの二つの分野を学びたいと考えており、学んでいるうちに決まるだろうと思っていたのですが、どちらも面白いのでまだ悩んでいます。この点について先輩方に伺いたく、ゼミを選んだ決め手を質問しました。先輩の中には、入学当初から卒論で扱いたいテーマが決まっていたのでその通りにゼミを選んだという方がいらつしやり、感銘を受けました。他の先輩方は、担当の先生やゼミの方針で選んだとご回答くださいました。先生への質問のしやすさを重視して選ばれる方が多いようです。ゼミの方針というのは、毎週の出席で進捗報告をするところもあれば、学生の主体性に任せられるところもあるそうで、自分の性格と相性

のいい方を選ぶようアドバイスをいただきました。今までは自分が何を研究したいかしか考えてこなかったもので、一年かけて一つの研究をするためにゼミとの相性は大切だという新たな視点を得られて勉強になりました。

他にも、先行研究と資料の管理の仕方や卒論執筆のスケジュール、就活と卒論と遊びのバランスなど、様々なお話を聞かせていただきました。先輩方のお話のおかげで卒論への不安が和らぎました。卒論執筆は大学に進学しないとできなかつたことですし、一生に一回のことなので、楽しくできたらいいなと思っています。最後になりましたが、貴重な休日にご発表に来てくださった五名の先輩方、本当にありがとうございました。

卒業論文発表会に参加して

三回生 神 村 青 空

私が卒業論文発表会に参加したのは今回が二回目でした。

昨年度は、特に自分が専門としたい分野も定まっておらず、ただ何となくの興味で参加していました。それと比べると、今年は専門としたい分野も決まっています、より明確な目的意識を持って参加でき、先輩方の卒業論文の発表やお話を聞くことよって卒業論文執筆について明瞭なイメージをもつことができました。

今回の卒論発表会に参加して良かったと感じた点は、主に次の二点です。

まず、一点目は自分の専門としない分野の知識を多く得られたという点です。私は国語学を専攻し、それについて卒業論文を書こうと考えているので、今後、和歌やその他文学作品について、論文に書かれるような知識をどの程度得られるかというのは不明であり、この発表会に参加しなければ知ることがなかったであろう知識を多く得られた感じています。例えば、時代によって和歌の詠み手の意識が変化することや、文学作品の中で特定の語がどのような意識の下使用されるか、というようなことを今回の発表会で知りました。このようなことは、自分自身が何を専門として研究するのに関わらず、卒業論文における着眼点をどのようなものとするかに深く関係するため、非常に重要な学びになったと感じました。

二点目は、卒業論文の執筆スケジュール（時期や手順、方法）などを詳しく聞くことができ、具体的な卒業論文執筆のイメージを持てるようになったという点です。

二回生や三回生時のゼミなどでも自分で調べたことや考えたことについての発表の機会があり、その際にレジユメの作成などをすることはありませんが、卒論規模の長い文書を作成するという経

験はなく、あまり具体的なイメージは持っていませんでした。今回の会では、質問の時間や発表者の方々からのアドバイスをいただいたり、質問させていただいたりする時間があり、先行研究の探し方やテーマ決めのやり方などかなり具体的なことで知ることができました。このような先輩方のお話の中で印象的だったのは、論文のテーマ決めの重要さについてです。テーマ決めの要素として、資料の探しやすさや扱いやすさ、先行研究の量（多すぎず少なすぎないものが適切）について考慮することが非常に大切であり、テーマによってはこれらの点で非常に研究調査が大変なことになる可能性があるというお話がありました。このようなお話が、まだ卒論を書き始めていない私にとっては非常に学びとなりました。

今回の卒論発表会に参加して、以上の二点について多くのことが学ぶことのできたと感じました。この会で学んだことを糧にし、四回生時には自分の書きたい論文をしっかりと書ききって卒業したいと改めて感じました。

発表してくださった先輩方、貴重なお話をお聞かせくださり、本当にありがとうございました。

国文学会ウォーク体験記（十一月八日）

嵯峨嵐山で叶う散策と学びの秋

四回生 川島 怜奈

今回初めて参加した学会ウォーク。清涼寺・落柿舎・御髪神社・野宮神社・天龍寺・嵯峨嵐山文華館を巡る行程で、聞きなみの無い場所を訪れることに少し不安を感じていた。しかし、先生方のご同行のもと、文学に関係する土地を実際に歩いて学ぶことに魅力を感じ、十一月八日を待ち遠しく思っていた。

ついに当日、ワクワクしながらお昼ご飯を済ませ、JR嵯峨嵐山駅に集合した。

みんなで歩いて清涼寺へ向かう様子は、まさに小学生の頃の社会科見学の時のように、どこか懐かしさを覚えた。学年が違ったり、初めて会う方が多かったりする中で、誰に言われるでもなく自然と二列になって進んでいく姿を見て、子どもの頃に身についた習慣が今も無意識のうちに表れていることが興味深く、思わず表情がゆるんだ。

そんなことを考えているうちに、清涼寺に到着した。中島先生や坂本先生からご説明を頂いた後、本堂の中へと進む。本堂には、絹で作られた釈迦如来像の五臓六腑が展示されており、その珍し

さに思わず目を見開いた。

しかしそれ以上に印象に残ったのが、枯山水庭園へと続く渡り廊下の美しさである。昼下がりの陽光が差しこみ、廊下全体がほんのり明るくなっていた。目の前に広がる景色は、スポットライトに照らされたかのような木々と弁天堂、そしてその姿を映し出す池。私の目には、その景色がキラキラと輝いて見えた。

続いて落柿舎へ移動した。中には入らなかつたが、その佇まいからすでに風情が感じられた。野澤先生からのご説明を頂いた後、御髪神社へ向かった。

その途中、自分と同じくらいの高さまで伸びた蓮の葉が一面に広がる池があり、足を止めてしまいたいほど印象的だった。

その後、御髪神社から野宮神社へ移動すると、修学旅行生や海外の観光客、着物姿の人々でも賑わっていた。坂本先生からのご説明を頂いた後に参拝したのだが、先生方が『源氏物語』とのゆかりと「えんむすび」や「進学祈願」との関連性に疑問を呈されているのを聞き、私も同じように首をかしげた。また、平安女性の後ろ姿が描かれた「子宝・安産」の絵馬も販売されており、『源氏物語』とのゆかりに関係性はあるのか疑問が残った。

天龍寺は、特に雲龍図や庭園が美しかった。庭園の奥へ進むたびに美しい景色が次々と広がっていて惹き込まれた。藤や椿、枝

垂桜なども植えられており、紅葉の季節だけでなく、他の季節にも訪れてみたいと感じた。

最後に訪れた嵯峨嵐山文華館では、浮世絵と美人画の軌跡が展示されていた。美人図の流行の変遷を示すパネルには、着物の柄や髪のとめ方が詳しく説明されており、大変興味深かった。展示されている中には唇が緑黒く彩られた美人画があり、少し違和感を覚えていた。しかし、口紅は「塗り重ねると玉虫色（艶のある緑色）」になるという説明があり、口紅が緑みを帯びるのは「笹紅色」と呼ばれ、下唇に紅を濃く施す化粧の方法であること、そしてその方法が文化・文政期に流行したことも知ることができた。今回の学会ウォークを通して、知らない場所を巡るという不安は、歩き始めるとすぐに新鮮な発見へと変わっていった。現地で見たり聞いたりしたことは、自分の中にしっかりと残る経験と学びになった。

2025年度学会ウォーク

一回生 山本桃子

今年、学会ウォークで訪れたのは清涼寺、御髪神社、野宮神社、天龍寺、嵯峨嵐山文華館だった。初めは、トロッコに乗る案もあったが、人数分チケットを取り寄せるのが難しく、今回のコー

スとなった。

我々一回生はパンフレット作りを任せられ、私は進捗を報告するための連絡係として携わることができ、責任と納期というプレッシャーすらも楽しく、黙々と（人に自慢しながら）作業していた。何よりも、同じ一回生のメンバーが私の案にいつも肯定的でいてくれたおかげで、私のやる気と集中力が途切れずに自分で言うのもなんだが割と良い出来のパンフレットを完成させることができた。

さて、学会ウォーク当日。

そこにはいくつかの懸念点があった。嵐山といえば言うまでもなく、クマである。今回のルートが思い切りクマの出没エリアに被っていた。先生方とその話になった際、勇気ある先生方が自ら人柱になろうと提案なされた。

しかしその先生のゼミにいつかお世話になろうと思っていたので、先生がいなくなったら困ると引き留めた。

また、藤花祭などの疲れや感染症の流行などにより本来より参加人数が減ってしまったが、無事決行できた。

十一月の嵐山はひどく寒いと聞き、おろしたてのセーターの上に起毛のマウンテンパーカーを羽織っていたが、体を動かしたためか上着をカバンにしまっても気にしない程度にはあたたかく感

じた。次回からはもっと薄手の上着にしようと思う。京都は竹林あたりに行くとおオスズメバチが飛び回っているので香水などは避けた方が良い。

合流した我々が最初に向かったのは、『源氏物語』に出てくる「嵯峨の御堂」のモデルと言われる「清涼寺」である。鯉が泳ぎ鴨が浮かぶ人口の池のある庭園は見事で、一枚起請文など浄土宗に関する展示が多いように思われる。

次に落柿舎前を通過して御髪神社へと向かう。クマは柿の木があるところに好んで出ると言う、それゆえにここが一番肝が冷えた。特に国文学に関係なさそうな御髪神社だが、本当に関係はない。ただ私が行きたくて提案したままで、御守りが欲しかっただけである。私が真っ先に飛びついて購入すると、上回生の皆様や池原先生も購入しておられた。

次に『源氏物語』で六条御息所の娘齋宮が伊勢へと赴任する前に身を清めるため滞在したと言われる野宮神社へ行った。そこにはインバウンドの影響がわかりやすく出ており、我々学会委員が集まれるスペースもなく、解説するにも観光客の声に掻き消される賑やかさであった。これに坂本先生も「最後の野宮神社参拝になるな」と疲れた様子であった。次にてくてく歩いて天龍寺、竹藪を通るのでオオスズメバチなどが飛んでいた。天龍寺の庭園へ

公開講座聴講記（十一月二十日）

と辿り着き、わあ綺麗だと出口へ向かったが誤って北出口へと行ってしまい、我々が目にしたのは野宮神社の鳥居だった。すなわち、迷い道くねくね状態になってしまった。そのせいで集合時間には大幅に遅れ、先生方や他の参加者の皆様に大変ご迷惑をおかけした。

そのまま集合し、すこし予定より遅く嵐山文華館へと向かう。そこは百人一首にまつわる展示が行われており、小野小町や在原業平などの歌人の小さな人形が置いてあったが、なにやらそれがどこか不思議な印象だった。次に皆様は二階の展示へと行かれたが、私は携帯の充電もなくお昼にありつけなかったので文華館内にあるカフェでサラダトーストを頂いた。そこで財布が大変軽くなったが、二階の展示を見終わった先輩方が同じ場所で軽食を取ろうとしたところ、オーダーストップの時間を過ぎてしまったよううで、モグモグとチーズトーストを頬張る私に「間に合わなかったよ」と一声かけてどこかへ行ってしまうわられた。

池原先生の講座を拝聴して

三回生 小松 彩結子

このたび、池原陽斉先生のご講演『拾遺和歌集』の時代の萬葉歌』を拝聴しました。今回のご講演の内容は、十一世紀初頭に成立した『拾遺和歌集』の時代を、梨壺の五人による「天曆古点」の影響によって『萬葉集』が読まれるようになった時代と認定したうえで、この時代の萬葉歌、とくに『古今和歌六帖』の所蔵歌を検討する、といったものでした。

前半では、『萬葉集』訓読の歴史について取り上げられました。先生は多くの文献を提示され、『萬葉集』には、「(萬葉) 仮名書き」と、読みを難しくする「訓字主体表記」という二種の表記法があること、そして訓読の精度は極めて高いことを説明されました。さらに、梨壺の五人による公的な『萬葉集』訓読が、『萬葉集』が広く読まれるきっかけとなった点も確認されました。

訓読の例として、巻十一・正述心緒・二五四二番歌の「二八十一」を、掛け算から「にくく」と読む例や、巻三・譬喩歌・三九四番歌の「義之」を、東晋の時代に「書聖」といわれた「手師」である王羲之にちなみ、「てし」と読む例などが紹介され、

非常に興味深かったです。

一方で、『萬葉集』巻四・相聞歌・六四九番歌の「夏葛之（なつくずの）」を「たまかつら」と読んだ例や、巻十・秋雑歌・二〇五五番歌の「遠渡者（とほきわたり）」を「トホサカルトハ」と読んだ例のように、訓読自体は難しくない表記の場合でも歌語や歌意の兼ね合いから「意識」を行う場合があることも示されました。

前半の内容を受けて後半では、読み誤りの起こりにくい仮名書きの巻十四を対象に、『六帖』との異同が検討されました。ここでも多くの例が提示され、字余り・非字余りの相違や誤写・誤読などにより、両者が一致する例はほとんどなかったものの、誤読・誤写が原因であるとは考えにくい例もみられ、平安朝写本に見られるような「翻訳」過程で生じた本文であると推定されました。また、『六帖』の写本の本文では得心することの難しかったです。また、『六帖』の写本の本文では得心することの難しい例に関して、版本の本文や他出文献を参照することによって、問題を解決できる可能性も指摘されていました。

今回の講義を通して私は、上代作品に残された断片的な情報を、根拠に基づいて論理的に読み解いていくことの重要性和、その難しさを実感しました。また、『萬葉集』を読むうえで欠かせない「訓読」の歴史とその実態について学べたことも、二回生の頃から

池原先生のゼミで学び、卒業論文でも萬葉集を研究したいと考えている私にとって、今後の研究に大きな示唆を与えるものでした。今回の講義で得た視点や知見を、これからの研究にしっかりと反映させていきたいと思えます。

二〇二五年度国文学科公開講座を拝聴して

三回生 吉川 環

今年度の公開講座で私は、池原先生の『拾遺和歌集』の時代の萬葉歌」を拝聴しました。「萬葉集の訓読」というテーマは、二回生時の基礎演習や三回生時の演習Ⅰで池原先生にお世話になった私にとつてなじみの深いテーマだったのでとても有意義な時間を過ごせました。

今回のご講演の内容は、前半部で平安時代中期までの萬葉集訓読の歴史を辿りながら、萬葉集の読みの難しさ・萬葉集に訓が附されはじめた時期の推定・平安時代中期の人々の訓読の実態（概ね問題なく読めていて、自分たちの好みに合わせて意識までしているなど、訓読の精度はかなり高いこと）をお話され、後半部で『古今和歌六帖』との異同の実態（誤写・誤読が原因のものと同訳された結果が原因のもの）をお話されるといったものでした。

私が印象に残ったのは、三章・四章の平安時代中期の人々の訓

読の実態の部分です。その精度やレベルの高さに驚きました。『石山寺縁起』に「萬葉集の訓読が難解と認識されていた」ことをものがたる説話が残されている一方で、掛け算を使ったり動物の鳴き声を使ったりする様々な難しい読み方を難なく読んでいたり、講演中池原先生が何度か口にされていたのが印象的な「順がこの程度の読みを読めないわけがない」という言葉通りであったし、また、意識まで行っていました。私が特に印象に残ったのはその意識の部分で、ただ読めるだけでもすごいのに、「読めるけど読まない」という選択のできる平安人にただただ驚きました。難しい読みを読めた上で、平安期にはもう使われなくなっていた古い語を自分たちになじみのある語に置き換えたり、歌らしくない語は使わないなど自分好みに直したりと、予想以上に高度なことを行っていた平安人の姿が強く印象に残りました。

二回生時・三回生時と、池原先生のもとで人より少しだけ萬葉集のことを学んできて、わかったような気がしていたけれど、今回のご講演で訓読のことだけでもまだまだ知らなかったことをたくさん学べて、とても勉強になったので、今後の自分自身の学びに繋げていきたいと感じました。

二〇二五年度公開講座を聴講して

博士前期課程一回生 土井 萌 菜

今回の公開講座では、『源氏物語』と漢文学との関係について、新聞一美先生よりご講演をいただきました。紫式部がどのように漢文学の知識を『源氏物語』に活かしているのかを、具体的な作品例を通して示してください、大変学びの多い時間となりました。

まず、『紫式部日記』の記事を参照しながら、紫式部が漢籍に對する深い素養を持っていたことを改めて確認しました。紫式部は兄以上に漢籍を読みこなしていたため、父・為時に「男子であれば」と惜しまれていたことや、宮中に仕えていた際には左衛門の内侍に「日本紀の御局」とからかわれて不快に感じていたこと、一方で中宮彰子には忍んで『白氏文集』を教えていたことから、当時の宮廷社会において女性が漢籍を学ぶことがいかに一般的ではなかったのか理解することができました。

次に、『源氏物語』の章段と漢文学の具体的な関連についてのお話がありました。桐壺の巻では「長恨歌」および「長恨歌伝」が踏まえられており、特に「目を側む」という語は、楊貴妃一族が権勢をふるうさまを周囲が「側目」していた文脈から取り入れられていたことを知りました。紫式部は単なる引用にとどまらず、

物語の教訓性や構造に関わる形で漢文学の要素を活かしていた点が印象的でした。

また、六条御息所の人物造形が「上陽白髮人」を踏まえているというご説明は、特に印象に残りました。「上陽白髮人」は、十六歳で入内しながら楊貴妃に嫉妬され、上陽宮で孤独に暮らす六十歳の女性を憐れんだ詩であり、その境遇が六条御息所の人生と巧みに重ねられていました。六条御息所も、同じ十六歳で参内し、早くに夫を亡くし、若い光源氏との関係の中で老いを意識したことや、賀茂での屈辱を経て三十歳で伊勢へ向かいます。こうした心情や境遇の描写に「上陽白髮人」の影響が見られ、女性の恨みや妬みを表現するうえで漢文学が重要な典拠となっていたことがわかりました。さらに、この詩が『和漢朗詠集』にも収録され、当時広く知られていた作品であった点も確認できました。

さらに、花宴の巻における光源氏と朧月夜の出会いの場面では、白居易や元稹の詩、元稹の自伝的小説『鶯鶯伝』が踏まえられているというご説明がありました。光源氏が桜の宴で詠む漢詩の韻字が白居易の詩と一致している点など、具体的な比較によって理解が深まりました。また、朧月夜が白居易の句「不明不暗朧朧」を題にした大江千里の歌を詠じているところへ光源氏が歌を返す場面に、漢文学が物語の表現に自然に溶け込んでいたことを実感

しました。

私は現在、大学院では『堀河百首』の万葉撰取について研究を進めています。今回のご講義を念頭に、当時の人々にとってどのような知識が共有されていたのか、そしてそれをどのように受容していたのかを考え、今後の研究に活かしていきたいと思えます。

二〇二五年度国文学科公開講座を拝聴して

四回生 辻 井 結 菜

このたび、新聞一美先生のご講演「源氏物語と漢文学」を拝聴しました。私は中古文学における漢詩文の受容に関心を持ち、現在中島和歌子先生の漢文学演習を受講している。本学の元教授で和漢比較文学研究の第一人者である新聞先生にお話を伺う貴重な機会を頂き、有意義な時間を過ごすことができました。

本講演は、『源氏物語』の巻ごとに本文を引用し、影響を与えた漢詩文と比較検討するというものであった。平安貴族らにとつて漢籍は常識的な教養として受容され、その価値観や規範は宮中の有職故実や文学表現において模範となっている。紫式部は幼少に兄弟の惟規に優る才から男子であればと父為時に嘆かれたり、宮中にて日本紀の御局という渾名を付けられたりしたなど、漢籍に熟知していたと分かる記述が『紫式部日記』に見られる。『白

『氏文集』は唐の詩人白居易の詩文集であり収作の「長恨歌」や「新楽府」の他に、元白と併称される元稹の詩などが講演で取り上げ説明された。

『源氏物語』の冒頭では、帝が一人の女性を寵愛することを、朝廷で天下の乱れの予感とし問題になる。これは『長恨歌伝』において楊貴妃やその一族の権勢に都の長官らが「目を側め」という政治的背景をそのままに再利用している。また桐壺巻は、帝が寵愛する更衣に先立たれ悲嘆に暮れる場面が展開するが、『長恨歌』や「新楽府」の「李夫人」における、漢の武帝と「傾国」の美女の愛妃李夫人を踏襲している。

花宴巻で、春の月夜に光源氏は政敵かつ入内を控える右大臣家姫君朧月夜と逢う。この場面では白居易の詩の月夜の表現や元稹の『鶯鶯伝』における若き日の恋が、情景描写や源氏の贈答歌に引用されている。

新聞先生のお話は、漢詩文を学び間もない私にも非常に分かりやすく、和漢比較文学研究という分野の理解を深めるものであった。文学的かつ文化的に特筆すべき作品であり多面的な着眼点で研究される『源氏物語』を、漢詩文の文脈や人物造形を踏襲しているという視点から改めて捉え直すことができ、より面白さと価値を再認識することができた。

『女子大國文』投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたものでも可)。

- ② ワードプロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワードプロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワードプロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。
- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。
- ③ 原稿については、引用の正確さと厳密さ、出典の明示、先行研究との重なりなどに留意すること。また二重投稿にならないように気を付けること。

六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピューターネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

本投稿規定は令和三年四月一日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は以下の通りです。

池原陽斉・大谷俊太

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読結果を報告、審議の結果、二点が掲載となりました。

また、京都女子大学国文学科編『吉澤文庫善本解題目録』刊行記念として小特集を掲載しました。これはこの目録が教育における活用を目的とし、FD活動の一環として作成したものであるため、在学生全員に配布する本誌において小特集を組んだものです。卒業論文発表会でご発表くださり、論文の要旨および論文執筆体験記を寄せてくださった卒業生の方々、お忙しいところありがとうございました。

今後とも会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(川島・山中)